

### 3. Y.M.C.A.の管理・運営

——在日本韓国Y.M.C.A.の場合——

新村 博信

#### 1. はじめに

Y.M.C.A.運動の始まりは、1844.6.6（木）、イギリスのロンドンにあった、ヒッチコック&ロジャース商会の店員ジョージ・ウィリアムスら12名の青年クリスチャン達によって起された。その社会的要因としては、①産業革命における労働者の貧困と生活・人間性の破壊、②信仰復興運動、③ピューリタニズム（清教主義）の三つが大きなものとしてあげられているが、キリスト教という信仰的哲学を背景とした社会教育運動を目的とした団体である。

そこでは、一般的には聖書的人間観を象徴し、精神と身体とに分裂した近代的人間観への抵抗の姿勢として、赤三角といわれるY.M.C.A.のマークが示す、Spirit（霊性）、Mind（知性）、Body（身体）の三つの側面の統一体としての全人を目指している。

日本では、1880年に社会運動というより、思想運動・文化運動としてスタートしているものがその始まりといわれている。

在日本韓国Y.M.C.A.は、世界に類をみない、ある意味では、特殊な存在といえるものであるが、現在の施設は1981年に建てられたものであり、歴史はまだ浅い。しかし、その前身となるものは、「日韓併合」（1910年）時代にまでさかのぼることになり、まさにその誕生は、日本と朝鮮という二国間の特殊な歴史的・社会的関係の中にあった。

#### 2. Y.M.C.A.における体育・スポーツ活動の位置づけ

先にも触れた、精神、知性、身体の統一体として人間をとらえ、全人教育としての体育の位置づけは、体育・スポーツのとらえ方としては、やはりヨーロッパ的であり、日本のそれとは違うと感じさせられる。しかし、今日的には“ウェルネス思想”として健康がクローズ・アップされている

ようである。現代社会の中での人間の健康をとらえる一視点としての“ウェルネス”という概念のようである。

ただ、日本を含めて今日のスポーツの普及という一側面では、Y.M.C.A.の果してきた役割については、歴史的にも大きな関わりを持つ部分もあり、無視できないものもあるように思われる。

#### 3. 今日の在日本韓国Y.M.C.A.の活動と体育・スポーツ事業

現在の機構は、(1)会員事業部門、(2)国際文化事業部門、(3)健康教育事業部門、(4)ホテル事業部門と大きく4つの部門から成立しているが、体育・スポーツ関係は、(3)の健康教育部門が担っている。健康教育部のスタッフとしては、職員5、専任講師8と非常勤講師7の20名、その他にボランティア・リーダー、実習生として学生（主にY.M.C.A.社会体育専門学校生）が若干名いる。

日常的なプログラムの中心は、水泳教室であるが、幼児から成人までの合計10のコースが設置され、その中には障害児のための水泳教室も含まれている。その他には、フィットネス・クラスや夏のキャンプ、冬のスキー・キャンプなどの事業も展開されており、年間プログラムの会員が約1000名、短期プログラムで約300名程の会員の参加があるものと考えられる。又、最近はスクーパー・ダイビングの講習・指導も行なわれ好評のようである。

水泳教室の指導体制は、1つのプログラムにその責任者P.D（プログラム・ディレクター）が1名いて、指導のチェック、安全管理、親との対応にあたり、各グループには約10名のメンバー（子ども）に対して1～2名の指導者（リーダー）があたっている。これら、P.Dやリーダーは、Y.M.C.A.の組織内でのトレーニング（研修）を受けている者であり、Y.M.C.A.の研究成果としての指導法（マニュアル）を学んでいる。しかし、実態としては、個人の力量にまかされ、指導が展開されていた部分が大であった。

在日本韓国Y.M.C.A.では、1987年の夏以降

から年3～4回（春・夏・冬）のスタッフ研究（修）会を行なってきた。これは、一年を三学期に分けて指導してきているその節ごとに、スタッフの指導の総括的な役割と、問題、課題解決のための研究（修）の場として設置されたものである。ここでは、Y.M.C.A.全体が持っているマニュアルにとらわれることなく、現場の子どもの姿にあわせた、実態にあった指導法を探り出そうという積極的な研究・学習の場であり、今までにかなりの成果をあげている。

また、スタッフ研究（修）会とは別に、日常的には専門と選択でゼミを行なっている（'89.4～）。ゼミには(1)水泳指導法、(2)発達、(3)スポーツ科学、(4)スクーパー、(5)野外活動の5つがあり、理論と実技の両面を組み合わせながら実践現場に、その成果を生かしつつある。これらの取り組みは、他のY.M.C.A.にも見られないものである。

#### 4. おわりに

ここに報告したものは、民間スポーツ施設といっても、いわゆるスポーツ産業としてのそれとはかなり性格が違っているものと考えべきだろうと思う。それは、Y.M.C.A.が元来その運動体としての目的を持ち、利潤追求のための活動として存在する団体ではないからである。また、それだからこそ、新しい試みも受け入れられたと考えられるが、それとて、在日本韓国Y.M.C.A.だからこそという側面も、またあるのである。

しかし、「社会体育」という分野が存在し、展開されるとするならば、今日の日本の実態のように、民間活力への移行が進められている時、利潤の追求でなく、人間形成の一端として捉える体育・スポーツのあり方を追求するY.M.C.A.の存在は、ある意味では新しい「社会体育」のあり方を追求する場となり得る大いなる可能性を、そこに秘めているということもいえるかもしれない。その意味でも、今後も注目をしていきたいと考えている。

#### 4. (資料) 「スポーツ産業の現在」

尾崎 正峰

今回の合宿の討論資料として提出したもののタイトルと出典は以下の通りである。

- (1)拙稿「スポーツ産業の現状と社会体育」『社会体育に新しい風を1987』1988.6
- (2)拙稿「教育・文化・スポーツ産業と婦人の学習」『婦人白書1899』、ほるぷ出版1989.9
- (3)企業の「文化戦略」をめぐる～『現代企業文化症候群』(『宣伝会議』別冊)、1984.10より～
- (4)スポーツ産業をめぐる(行政、経営実態、未来予測、etc.)～月刊『パースパイア』(スポーツビジネス研究所)より——( )内は発行年月～
  - ①フィットネス行政と関連団体の動向 (1988. 5)
  - ②労働省の企業フィットネス助成制度発表&厚生省、健康増進関連ビジネス指導室を設置 (1988. 7)
  - ③労働省の企業フィットネス助成制度 (1988. 8)
  - ④最新版フィットネスクラブの傾向分析 (1988.11)
  - ⑤a RUSH of GOLF CLUB (1989. 2)
  - ⑥昨年オープン施設の分析と89オープン数予測 (1989. 4)
  - ⑦90年代型フィットネスクラブの開発コンセプトとドライゾーンの捉え方 (1989. 9)
  - ⑧データにみる成功するクラブの条件 (1989.10)
  - ⑨テニスコーチの〈期待〉と〈不安〉 (1989. 2)

ここでの資料選択は、現在、急速な展開を見せてきているスポーツ産業の実態をできる限り正確にとらえていこうとするための基礎的作業として位置づくものである。

スポーツ産業の実態については、これまでにも